



臨床心理士養成課程における学内実習での中断ケースに関する文献研究

著者	赤嶺 直子, 岡田 和久
雑誌名	明治学院大学心理学部附属研究所年報 = Annual Report of the Meiji Gakuin Institute for Psychological Research
巻	5
ページ	63-67
発行年	2012-05
その他のタイトル	A review of studies on discontinued cases in clinical psychologist training
URL	http://hdl.handle.net/10723/00003743

臨床心理士養成課程における学内実習での 中断ケースに関する文献研究

赤嶺 直子^{*1}・岡田 和久^{*2}

要約

臨床心理士養成課程における臨床実習は実践教育において重要な柱であり、その一環として大学院生は大学付属の心理臨床施設に来所するケースを担当している。本論文では、実習において大学院生が担当するケースの中断に関する文献を概観し、中断について考察した。その結果、中断を捉えるうえでの視点の多様さ、それによる中断の定義の難しさが明らかになった。また、ケースの中断は必ずしもネガティブなものではなく、少ない面接回数によってもクライアントに効果を生じさせている可能性も考えられた。今後の課題として、ケースの中断に関する研究を積み重ねること、クライアント側の視点による心理面接の捉え方を探ること、さらに、それらを踏まえてクライアントのニーズに則したカウンセリングを提供するための教育システムを検討していくことが示唆された。

キーワード：中断、学内実習、面接回数

I 問題と目的

臨床心理士養成課程における臨床実習は、心理臨床実践そのものを教育する上での重要な柱である（森ら、2010）。当心理臨床センターのような大学付属の施設においても、そのカリキュラムの一環として、当センターに来所するケースを大学院生（以下、相談研修員）が教員の指導の下に担当している。大学院にて修練を積んでいる時期にある相談研修員にとって、初めてケースを担当し、心理面接を行うということは相当な緊張や不安を伴うものであることは想像に難くない。そのような中でのケースの中断というのは、相談研修員にとって、大きな意味を持つと考えられ、心理臨床実習におけるケースの中断に関する考察を進めていくことは有用であろう。そこで本論文では、臨床実習で相談研修員が担当するケースの中断に関する文献を概観し、考察することを目的とする。ケースの中断に関する知見を探ることは、実際に学

内実習を行っている相談研修員だけでなく、臨床心理士養成の実習における教育システムを再考するためにも有意義な資料を提供することにつながると思われる。

II 学内実習におけるケースの中断に関する文献調査

1. 文献検索

臨床心理士養成課程における臨床実習の中断に関して、文献を確認するために、国立情報学研究所のCiniiでキーワードを入力し論文検索を行ったところ、「臨床心理実習・中断」0件、「心理実習・中断」0件、「実習・心理・中断」0件、「臨床実習・心理」63件、「ケース・中断」20件であった（2012年5月28日アクセス）。「臨床実習・心理」の検索結果63件のうち、臨床心理士養成課程における学内での心理実習に関する文献は0件であった。また、「ケース・中断」の検索結果20件のうち、臨床心理士養成課程における学内での心理実習に関する文献は0件

※1 明治学院大学心理臨床センター

※2 明治学院大学心理学部

であった。

次に、当センターに郵送されてきた過去3年分の各大学の心理臨床センター紀要および年報84校のうち、学内実習の中断ケースに関する研究について調査をしたところ、全1991論文中4論文(0.2%)であり、わずかな報告数であった。

したがって、臨床心理士養成課程における学内実習でのケースの中断については積極的に取り扱われていない可能性が示唆された。

2. 中断の要因と相談研修員への影響

学内実習における心理実習に関する文献はあまり多くはなかったが、臨床心理士の心理面接における中断の要因については少なからず検討されている。例えば丹治ら(2008)は、心理面接の失敗について臨床心理士に調査をした結果、その要因として、「間違っただ介入」「不適切なアセスメント」「セラピー構造の崩れ」の順に多かったことを報告している。また、西村ら(1995)は学生相談における早期中断例について考察している。そこでは、カウンセラー側からみた中断の要因として、クライアントの期待とは異なる部分に焦点をあてて関わっていたことや、セラピストが捉えていたクライアントの理解と実際の関わりのずれがあったこと等が指摘されている。

篠原ら(2010)は、心理面接の中断のなかでも相談研修員特有の中断について検討し、中断の実際について考察している。そのなかで、相談研修員はケースが中断に至ったのはセラピスト側の要因として受け止めてしまいやすいこと、そして、その背景には、クライアントが来所しない理由がクライアント本人から相談研修員に伝えられるケースが非常に少ないことが指摘されており、クライアントから来所しなくなった理由が伝えられなかった場合の相談研修員の傷つきの大きさについても言及している。

さらに岩壁(2007)は、大学院生や初心者は、特に失敗や自身の力不足を意識させられるような状況に曝されることが多いと述べており、もともと自分の力量に不安をもちやすい初学の時期に、自分の力量や臨床場面での振る舞いを評価され続ける状況におかれるために、失敗に対しての過敏さ、そしてそれを扱わないような傾向が身についてくることを指摘している。これは、臨床心理士資格取得の途上にある相談研修員という立場を考えれば、想像に難くないといえる。

このように、ケースの中断にはネガティブな側面が取り上げられやすいが、その一方で、中断に関するポジティブな側面も指摘されている。例えば西村(1995)は、クライアント側からみた中断の要因のひとつとして、クライアントの「健康さ」によってクライアント自身の力で自己の考え方などを整理していったことが述べられている。また織田(1998)は、心理療法の持つ侵襲性を指摘しており、中断が治療を継続することによって引き起こされる破滅的な状態を防ぐ意味をもつと指摘している。その他にも、クライアントが中断を自ら決定する行為そのものがクライアントの自主性を促進させたり、発達課題を解決させたりするという側面があることが指摘されている(河合, 1970; 馬場, 1999; 森田, 2003)。

このように、中断はセラピスト側からみればセラピスト自身の対応のまずさによるものとして、一方、クライアント側からみればクライアント自身の健康さによるものとして捉えられることから、どの視点から捉え直すかによって、ポジティブにもネガティブにもなり得ると考えられる。

III ケースの中断と面接回数

森ら(2010)は、インターク面接以降、継続

面接となった全ケースの面接回数を調査しており、その結果、面接回数1~2回であるものは28.0%で、3~6回が30.0%であり、全体の約6割が6回以内であったことを指摘している。また、赤嶺ら（2012）によれば、学内実習におけるケースが中断に至るまでの面接回数の中央値は4回であったと報告している。このように、学内実習のケースは比較的少ない面接回数で中断に至る可能性が示唆される。

ところで、シングル・セッション・セラピーで有名な Talmon（1990/2001）は、1回だけの面接しかしていない200人の自分の患者への電話調査を行っている。その結果、78%の患者は1回の面接で欲しかったものが手に入ったので当該の問題に対して以前より良い感じ、あるいはかなり良い感じを持つようになったと答えてくれた、と述べており、一方セラピスト、あるいは面接の結果が気に入らなかったと答えた患者はわずか10%であったと報告している。また、Comings, et al（1976）によれば、別の病院での5年間にわたる追跡調査の結果においては、患者が1度の心理面接を受けたことによって、その後医療施設を利用する総合的回数が著しく減ることが明らかになっており、「継続的心理療法をしないたった1度のセッションによって、その後5年間の医療施設利用が60%も減らせるという発見は驚きであり、まったく予想もしていなかった」と述べられている。

臨床心理士養成課程における一般的な教育システムでは比較的長期の継続的な面接が好ましいものとされている。しかし、上記の調査のように、必ずしも長期的に継続している面接でなく、1回の面接のような少ない面接回数においてもクライアントの症状や問題が回復する可能性があることが示唆される。これは、学内実習のケースにおいて比較的少ない面接回数で中断と思われる事態が生じたとしても、それは必ずしもネガティブな面接であったのではなく、ク

ライアントにとって有用なポジティブな面接となっている可能性があったことも否定できないといえよう。もちろん、セラピストは普段から自身の面接を反省し、今後に生かすことが必要なことは言うまでもない。しかし、セラピスト側の視点からの反省だけではなく、実際にクライアント側がどう感じていたのかを客観的に調査・研究していくことは相談研修員への過剰な中断への不安を低減させる可能性があると考えられる。

IV 「中断」について

1. 「中断」という定義の困難さ

これまで学内実習におけるケースの中断について考察をすすめてきたが、この「中断」という定義自体について検討することも有用と思われる。しかし、心理臨床大辞典（氏原ら、2010）の巻末索引には「中断」の用語は掲載されておらず、何をもって心理面接の中断とするのかといった「中断」の定義については研究者ごとに異なり、一様とはいえない。例えば、精神分析事典（小此木ら、2002）によれば、伊崎（2002）は中断を、「外的な困難（治療者あるいは患者の転居、病気、経済的理由）、健康への逃避、転移性治癒、精神分析が手詰まりになって患者と治療者とがもはや続けるべきではないという同意をした場合などに、治療目標に到達されないまま関係が終わること」と定義している。また、佐野ら（2004）は中断を、「心理療法契約（治療契約）の成立後、心理療法目標（治療目標）を達成していないのにもかかわらず、心理療法関係を終わらせること」と定義している。さらに、篠原ら（2010）は中断の基本的な定義として、「クライアントの症状およびパーソナリティが全く、あるいは部分的にしか改善されず、セラピストとの別離も不完全のまままで面接が終わることを指している」と述べている。

このように、中断の定義には様々なものがあり、どのように中断を定義するかについては困難さを伴うと考えられる。

2. セラピスト側の視点による「中断」

上述の定義によれば、いずれも治療目標へ到達する前に面接が継続されなくなった事態のことを「中断」と位置付けているようである。しかも、治療目標が達成されずに中断と捉えているのはセラピスト側であることが多い。白鳥(2012)は、これまでの国内における研究にはセラピスト側の視点でカウンセリングを捉えているものが多く、クライアント側の視点に立った研究が少ないことを指摘している。また、Garfield(1994)は、セラピストが考える臨床的な改善があるか否かに関わらず、クライアント自身にとって十分に回復すると来談しなくなることを指摘しており、50%以上のクライアントは1~2回の面接で変化を感じることを示している。このように、クライアントとセラピストの面接目標に対する予測と期待には大きな違いがあり、セラピストが中断であると認識しているケースでも、クライアント側の視点から見るとその心理面接のプロセスにおいては何らかの効果をあげている可能性が考えられる。

以上のように、セラピスト側による「中断」の判断では、クライアント自身が一定の効果を感じていても、一方でセラピスト側としてはまだ目標には到達していないといった認識のずれが存在する可能性が示唆されることから、クライアント側の視点による「中断」についても検討する必要があるだろう。

V 今後の課題

本論文では学内実習におけるケースの中断に関する文献調査と「中断」そのものについて考察した。その結果、学内実習のケースの中断に

関する研究の少なさ、面接回数少なさだけで中断と判断されやすい可能性、どの視点から判断するかによって中断の捉え方が変わること、が示唆された。今後は、クライアント側の視点からみたカウンセリングにおけるニーズ調査を通して、よりクライアントにとって有益となる治療モデルのスキルを修得させるような教育システムを検討していく必要があると考える。

文献

- 赤嶺直子・木田麻由子・岡田和久(2012): 臨床実習で大学院生が担当するケースの中断に関する基礎研究. 日本心理臨床学会第31回大会発表論文集
- 馬場禮子(1999): 徹底操作と終結 精神分析的な心理療法の実践—クライアントに出会う前に 岩崎学術出版社 pp.139-157.
- Barrett, M. S., Chua, W., Crits-Christoph, P., Gibbons, M. B., D. Casiano, & Thompson, D. (2008): Early withdrawal from mental health treatment: Implications for psychotherapy practice. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training*, 45(2), pp.247-267.
- Cummings, N. A. and Follette, W.: "Brief Psychotherapy and Medical Utilization." In H. Dörken and Associates, *The Professional Psychologist Today: New Developments in Law, Health Insurance, and Health Practice*. San Francisco: Jossey-Bass, 1976.
- 藤沢敏幸(2009): 大学院における心理臨床教育・訓練に関する一考察(5) 心理教育相談研究(8) 安田女子大学 pp.1-12.
- Garfield, S. L. (1994): Research on client variables in psychotherapy. In Bergin, A. E. & Garfield, S. L. (Eds.) *Handbook of psychotherapy and behavior change*.

- New York : Wiley. pp.190-228.
- 岩壁茂 (2004) : クライエントの初回面接の体験－札幌学院大学心理臨床センターにおける実践的研究の取り組み－ 札幌学院大学心理臨床センター紀要(4) pp.1-16.
- 岩壁茂 (2007) : 心理療法・失敗例の臨床研究－その予防と治療関係の立て直し方 金剛出版
- 伊崎純子 (2002) 中断 小此木啓吾編集 代表精神分析事典 岩崎学術出版社 pp.338-339
- Jeremy P.Shapiro, Carolyn J.Welker, and Bobbie J. Jacobson (1997) : The Youth Client Satisfaction Questionnaire: Development, Construct Validation, and Factor Structure Journal of Child Clinical Psychology 26 (1) pp.87-98.
- 河合隼雄 (1970) : カウンセリングの実際問題 誠信書房 pp.152-174.
- 森田美弥子 (2003) : 青年期臨床における面接中断の意味 森田美弥子・川瀬正裕・金井篤子 (編) 21世紀の心理臨床 ナカニシヤ出版 pp.228-244.
- 森椎葉・小野綾子 (2011) : 心理臨床センターにおけるいわゆる「中断・早期終了」事例の分析 山梨英和大学心理臨床センター紀要(6) pp.2-10.
- 西村智代・島田修 (1995) : 学生相談における早期中断例についての一考察 川崎医療福祉学会誌 5(2) pp.79-86.
- 織田尚生 (1998) : 面接の中断と治療関係 小川捷之・横山博 (編) 心理臨床の治療関係 心理臨床の実際6 金子書房 pp.154-171.
- 佐野直哉・北村晃一・田中美砂子・高橋芳・紅林洋子 (2004) : 精神分析的な心理療法の中断に関する研究(1)－中断の分類：問題提起と本研究の視点－ 明治学院大学心理臨床センター研究紀要(2) pp.21-36.
- 篠原恵美・田中健夫・保坂美里・貴家さやか・手川真由美 (2010) : 心理面接の中断・早期終結についての文献展望－研修生特有の課題を明らかにする－ 山梨英和大学心理臨床センター紀要(6) pp.11-23.
- 白鳥志保 (2012) : 初心者カウンセラーとの初回面接をめぐるクライエントの主観的体験－試行カウンセリングを用いたプロセス研究－ 明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻修士論文
- 鈴木俊太郎・皆川州正 (2008) : ソリューション・フォーカスト・アプローチにおけるクライエントの満足感について：協同問題解決満足感尺度による検討 日本ブリーフサイコセラピー研究 17(2), pp.80-90.
- 丹光浩・橋本和明・安藤修・東牧子・小川恭子 (2008) : 心理療法における失敗要因とその防止策について 花園大学社会福祉学部研究紀要(16) pp.43-51.
- Talmon, M. (1990) : Single Session Therapy Jossey-Bass Inc., Publishers (青木安輝(訳) (2001) シングル・セッション・セラピー 金剛出版
- Tryon, G.S. (2002) Engagement in Counseling. In Tryon G.S. (Ed) Counseling Based on Process Research:Applying what we know.Allyyn and Bacon, Boston, Ma, pp.1-26.
- 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕 (2010) 心理臨床大辞典 [改訂版] 培風館